

文化高知

2004年3月 NO.118



「唐組」 小嶋博子

〈もくじ〉

土佐の風土と文化	岡崎誠也	2
高知県アンテナショップ	平永登与信	3
「前説」が教えてくれたこと	坂本昌隆	4~5
横山さんの夢・「春夏秋冬」発刊に寄せて	鍋島康夫	6~7
パン屋の昔話	永野雄敏	8~9
中国茶の世界② 仕入れの旅	西岡克己	10~11
宿毛文教センター開館10周年記念事業で感じたこと	矢木信欣	12
まんさい—こうちまんがフェスティバル2004		13
風俗歳時記・風伯		14~15

土佐の風土と文化

岡崎 誠也

私が「文化」という言葉に行政マンとして最初にふれたのは「行政の文化」ということが盛んに言われていた昭和五十年代です。

当時、横浜市などがオビニオンリダーとなり、予算の1%を当該事業に上乗せして文化的な向上につなげていこうという行政の動きがあり、高知市としても検討した経過があります。

学校施設整備や公共施設整備のなかでこの1%のシステムは必ずしも定着はしなかったものの、市民の皆様方と文化行政をとともに考えるきっかけにはなったものと思います。

常に思うことですが、ここ土佐には優れた歴史と文化があり、その流れは土佐人の中に脈脈と生き続けているものと感じています。

幕末から維新にかけて、土佐人は新しい時代を開くために、多くの人

材を犠牲にしなが、新しい時代の扉をこじあけました。

京都の靈山神社にまゐりますと、坂本龍馬や中岡慎太郎をはじめ、土佐の志士たちが数多く祭られていますが、土佐の若い明日を担う優れた人材が幕末にいかにも多く失われたかを深く実感する場所でもあります。

歴史に「もし」はありませんが、土佐の若い人材が幕末から維新にかけて、命を落としていなければ、土佐の若い力が日本を動かしていたことは間違いないと確信します。

直情型の土佐人は理想のためなら命も捨てかねないので、そこが土佐人の長所でもあり、欠点であるかもしれません。

もう少し冷静に先が見通せ、用心深く行動できていればと悔いが残ります。

常に新しいものを求めつづけ、進



取の気風に富む土佐人は、その性格からか、残念ながら文化遺産的なものを保存し、残す意欲が薄かったのか、市内に文化的施設が少ししか残っていないことは残念ではあります。それが新しいものを求めつづける土佐人らしいかなとも思うところです。

高知市は優れた歴史と文化がありますが、戦災のため歴史的建造物が少なく、城下町としての雰囲気がないのは残念ですが、土佐で生きる人々は藩政時代の心意気を持っているのかのごとく、本音で付き合うと大変活しており、本音で付き合うと大変

に楽しくおもしろい。

気さくで、外見より意外と(?)やさしく、親身になって身内のように心配してくれる。このことは、おそらく藩政時代からの土佐人の生き様と変わっていないのではないかと感心する次第です。

我々は、この土佐人の明るく、率直にもの言える県民性を大切にしながら、次の時代を担う土佐っ子たちに、すくすくと健やかに育つてもらう環境を大事にしたいと思う今日このごろです。

(おかげささいや/高知市長)

高知県 アンテナショップ

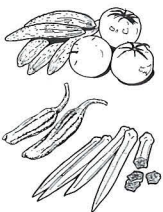


平永登与信

昨年三月から東京の築地で高知県産品のお店「コウチ・マーケット」を営業している。お客さんからは、時々「高知(出身)の方ですか?」とか「何で築地に高知の店があるの?」と聞かれる。私自身、この店をやるまでは高知県には縁も縁もなかった。今考えるとかなり無謀であったかも。せめて、高知県に関係のある店員を雇いたかったが、それも果たせないでいる。

なぜ築地かといえば、祖父の代からここで食料品店を営んでいたから。知り合いから高知県で「アンテナショップ(民営)」の公募があることを教えられた。築地なら関東の遠方からお客さんも来るし、高知のお店なら珍しいから売れるんじゃないか、やってみよう。そうしたら、昨年の三月に知事の認可をいただいた。

たしかに開店一周年も迎えていな



いが、いまだ運営は手探り、商品を出してくれる高知県の事業者、生産者の協力、県職員の方々の助力なしでは今日なかったと思う。

以前の仕事は築地市場でほとんどの商品仕入れを行って商いをしてきた。アンテナショップをやるようになって、必然的に仕入れの九割以上は高知県から直送になった。東京で築地市場は全国食品の集積地として一番だけ、よく見ると物流が巨大すぎて商品から生産者の顔が見えてこない。こう言っちゃなんですが、

地方のほんとうに価値あるものが粗末に扱われている。当店は、「全

国の品が何でもそろう」といわれている築地の中でも「他の店にはないものばかりある(高知産のみだけ)」と評価されている。こんなちっぽけな店に商品を送ってくれる高知県の生産者には本当に感謝だ。

私はこの店をやる前は高知県へ行ったこともなかった。それが高知県産品ばかり扱うようになってから私自身、店員も含め高知のファンになった。今では高知で生まれ育ったような顔をして商品の説明をしている。

もつとも本物?の高知県人がご来店された時は積極的に教えを請う。応援してくれるし、品揃えに貴重なご意見をちょうだいしている。こちらが、あまりに知らないで呆れているのかも、誠に申し訳ない。

県のアンテナショップであるから、他の商店のように、単に物売ってもうければいいというものでもない。首都圏のお客様に高知の品を少しでも浸透させたいと思っている。

お客様から商品にご意見があれば生産者に伝えるようにしている。また、お客様が気に入って、直接、高知県から商品を取り寄せることもいいとしている。当店で高知の「いいもの」を見付けてくれただけでもうれしい。

高知の品しか扱えないという営業

上のマイナスを価値ある商品の品揃えでメリットに替えていなくては。そんなわけで、当店の運命?はひとえに高知県産業界!の商品力にかかっているのです。よろしくお願いいたします。

毎日、店頭には新しいお客様が来られる。高知の店とは知らずに入って、所狭しと並んでいる県産品をみて、

「土佐の物ばかりなの?」

「はい、高知県のアンテナショップですから」

「期間限定の出店なの?」

「いいえ、ずっと無休で営業しています」

「面白い店だから、また来るわね」
「よろしく。ぜひ、また来てくださーい!」



リピーターのお客様も増えてきた。商品を通じてただだが、高知県のことをもつともっと知ってもらいたいと思っている。

(ひらながとよのぶ/コウチ・マーケット代表者)

「前説」が教えてくれたこと

坂本昌隆

昨年、テレビ・キー局の映画番組から「前説（まえせつ）」が消えてしまった。最後の砦のテレビ東京が「木曜洋画劇場」の前説を廃止したからだ。現在でも、映画番組放送前に少しのナレーションを付けている局もあるがあれは前説とはいえないだろう。最近では若い人も使う前説という言葉だが、もとは映画業界用語である。無声映画時代に活動弁士が映画上映前に解説をしたことを指す。前説の巧みさも個々の弁士の個性や人気につながったという。

テレビの映画番組は、昭和四十年代には各局の看板番組だった。昭和四十一年にNET（現・テレビ朝日）「日曜洋画劇場」、昭和四十四年にTBS「月曜ロードショー」、東京12チャンネル（現・テレビ東京）「木曜洋画劇場」、昭和四十六年フジテレビ「ゴールデン洋画劇場」、そし

て昭和四十七年日本テレビ「水曜ロードショー」がそれぞれ二時間枠でゴールデンタイムに放送開始される。各社とも放送作品を充実させる一方、個性的な前説（解説者）が登場して激しい競争が繰り広げられた。前説には、「知識」と「話芸」が求められたが、特に目立っていたのは、淀川長治氏、荻昌弘氏、水野晴郎氏のお三方であろう。

「日曜洋画劇場」の淀川氏は、いわずと知れた「映画の伝道師」。残念なことに同番組は高知県ではレギュラーの放送枠がなかったため、時々高知放送で流されるものしか視聴することができなかった。「まあ、コワイ、コワイですね」と、映画を見るよりもお話を二時間聞いた方が面白そうなのは、ご存知の通りである。「月曜ロードショー」の荻氏は、東大文学部卒で高度な映画批

評も執筆することなどから、「知的なムード」がウリだった。が、同番組ではマカロニ・ウエスタンやB級アクション物なども多数放送されたため、彼は終わりの解説をこう締めくくる時もあった。「こういう映画を作る人の感覚がわかりませんね」。二時間近く熱心に見続けた視聴者にとっては「いまさら、そんなあ」と言いたくなる言葉だが、ご本人は正直な方だったのだろう。「水曜ロードショー」の水野氏は、今では自身が山下奉文役を熱演する「シベリア超特急」シリーズを監督されている。とにかく「いやー、映画って本当に素晴らしいですね！」に象徴されるように、完全肯定タイプで、どんな映画にも何かしら良い所を発見して明るく解説される技術は見事というほかはない。同番組では放送権料二十三億円ということで話題にな

った「ジョーズ」（一九八一年放映）が、視聴率37・7%とそれまでの〈洋画〉放送の最高記録を打ち立てる。この時の主人公の三人の吹き替えは、滝田裕介、北村和夫、樋浦勉の名優方で、翻訳と演出も素晴らしい、さながら良質の舞台劇をみるようだった。

八〇年代も後半になると、レンタルビデオの普及により人々が好きな時間に好きな映画を楽しむようになる。映画番組は放送局のお荷物になり、前説は削られ、映画番組自体も少なくなる。放送局は高い値で映画を買って放送するよりも、映画を製作する方に力を注ぎ始める。こうした時期に、荻、淀川の両氏が亡くなられたのはテレビ映画劇場衰退の象徴的な出来事だ。

時代は前後するが、高知のローカル民放局でも午後を中心に独自のテ

レビ映画劇場が存在した。

高知放送（昭和三十四年テレビ放送開始）では、高知市の映画・舞台・文学評論家の細木秀雄氏が映画の前説をされた「RKC映画劇場」という番組があった。ローカルの映画番組に解説がつくということは異例で先駆的な番組だ。二、三年間は続いたというが、残念なことに私は幼児だったためか記憶がない。

テレビ高知（昭和四十五年放送開始）は、番組のオープニング曲に映画「理由なき反抗」のテーマ曲を使い、前説のない「あなたの映画劇場」を登場させる。なぜか月曜と火曜、水曜と木曜、はそれぞれ同じ映画を放送していた。一時間半番組なのに印象に残る映画を放送していた。英国ハマープロの「ドラキュラ」をはじめとする恐怖物、アメリカのB級SF物などをみた夜はトイレに行くのが恐かった。同局は後にアナウンサーを前説にした週末深夜の「時代劇映画」枠を設ける。短命に終わったがその志は評価する。

私が高知市広報「あかるいまち」

や新聞を読む年ごろになると、高知市立中央公民館や高知市民図書館が映画会を開いているのを知った。余り興味がない邦画だったが一度足を運んでみた。担当の映画評論家の方が丁寧な前説をされて映画は始まった。小津安二郎の「晩春」である。昨日まで洋画や特撮物ばかり見ていた子供が、小津をみて「日本映画はこんなに素晴らしいのか！」と思っただけから、オクテなのかオマセなのかよくわからない。前説がなければ「晩春」を十分に理解できなかったらう。以後は、邦画に、非ハリウッドに、映画鑑賞の守備範囲が大いに広がった。

次に出会った前説は、ずいぶん後の図書館映画会における細木秀雄氏のものである。以前から氏のお宅へお伺いしていたものの前説は初めてだ。威厳に満ちて奥行きのあるものだった。例えば、「華麗なるギャツビー」において、小説で描写される「明かり」を映画でいかに苦労して再現したか、その「明かり」にどのような意味があるのか、を丁寧に解

説された。中央公民館では、市民講座の一つとして細木氏の映画・演劇・テレビ講座を行った年があった。有意義な講座で、芸術系の大学の四年間で習うようなことを二、三カ月で話していただいた。参加者がわずか二、三人だったのが残念だった。その講座で細木氏から、映像を理解するには文学を中心とした他の芸術分野にもよく接するよう指導された。それからの私は、会社勤めを続けつつ学芸員資格を目指して美術の分野に没頭したり、以前から続けていた華道を深めたりと映像以外の創作に打ち込んだ。今後もインプロット（鑑賞）とアウトプロット（創作）両方のバランスをとりつつ継続せねばならぬと肝に銘じている。

映画を一顧客として気分転換に鑑賞するだけでなく批評するには、映画の知識や芸術はもちろん、幅広く社会情勢についても知っておかねばならない。多くの前説によりそのことを理解できたことは素晴らしい体験だった。ありがたいことに、時々、映画紹介を書く機会を頂く。自分と

は性別・年齢の異なる色々な観客の方々の立場になると不思議に「面白い」と感じる所がたくさんみつかると、そういう作業が続いていると、前説をされた先達が「いかに見る人の立場になって、わかりやすい解説をしていたのか」。その苦勞を知った。

現代は便利さを追求した結果、自然だけでなく精神や魂の環境破壊が進んでいる。未来の高知を担う子供たちや若い世代の皆さんには映像文化に接してもらおうことで、豊かな感性を育んでほしい。私は映画紹介といった狭義の文化活動に限らず、広義の生活文化や産業文化などを通して、今後も生命の続く限り生まれ育った地元高知に恩返しをしたいと思う。「前説が教えてくれたこと」を次の世代に伝えることもその一つだ。

*時代の雰囲気伝えるために年号と西暦を用いて、あえて統一しなかった。

（さかもとまさたか／映像芸術研 究家）

横山さんの夢

「春夏秋冬」発刊に寄せて

鍋島康夫

横山龍雄さんが、高知市長に就任して初めて迎えた昭和五十四年のお正月。当時、高知新聞の市政担当であった私は尋ねた。

市長の初夢は何ですか？

「街から電柱や電線をなくせないものでしょうかねえ」

そういう市長の目指す街は？

「県都の近代化」とか「都市機能の向上」といったお役人的模範回答？を想定して、その理由を再質問する青二才記者に、

「街路でも樹木が安心して大きくなれるでしょう」。

ウンは言いませんと平然と嘘をつく、今も昔も変わらない海千山千の

政治家と称する輩を相手に、裏読みや本音を類推する訓練ばかりしていた駆け出し政治記者にとつて、「横山流言語表現」には少しカルチャー・ショックを覚えた。

（このおんちゃんは固有の言葉を持つている）

そして直感的にこうも思った。

（坂本昭さんとは全く異質のトップだ。巷間言われるようなワンポイント・リリーフとは違う。軟投型のエースになるかもしれない。）

「横山さんの夢」は二年余り後、実現にこぎ着ける。

昭和五十六年元旦の高知新聞は社会面のトップで、「電柱のない街実現へ・横山市長の夢かなう」と報じた。

中ノ橋通から追手筋の間、約四百メートルで電話線と電線の地中埋設化が図られることとなったのだ。

市政を巡ってはこのころ、端数超勤総量支給・いわゆるヤミ給与問題、下知下水処理場カラ工事、一連の職員不祥事、下水道料金請求漏れといったあんなばいでもめごとのデパートのような様相を呈していた。

横山さんは次から次へと露見する問題の処理に忙殺された。当然、報

道する側は市執行部や議会とは緊張をはらむ。ジャーナリズムは本能的に「隠し事を暴く」という指向をもつからだ。

しかし、こういう時だからこそ、何とか市長の願いを実現する術はないものか。私も四国電力や当時の電電公社など関係機関をせっつき、「松山で出来ることが高知でなぜ出来ない」と毒づいて側面援助した。

この話には後日談がある。「よさこい祭りのころまでには横山市長の願いがかなうだろう」という当初の見通しが、かなり後ろへずれ込みそうになった。四電の本社と高知営業所との調整が手取ったのが主な原因のようだった。

市議会で野党議員から「電柱はのうなっちゃあせん。市長の初夢はウソか。高知の記事は誤報か」と嫌味な質問も飛び出る始末だった。

特ダネのつもりで書いた私もメンツをつぶされそうになり、「高松の四電本社はアタマが固い。批判記事を書く」と息巻いた。

横山さんとM営業所長に「どうぞやめてください」「本社を刺激したら本当に夢のまま終わってしまう」と懇願され、自重した。

しかし、思いは「高松」に伝わり、新聞で騒がれてもまずかろう、と事

業が認められたのだという。

いまでは当たり前になった都市中心部の電線・電話線地中埋設は「市長の夢実現」というかたちで第一歩をしるしたのだ。

*

*

横山さんが急に亡くなったのはや六年もの歳月が流れた。いや、むしろ、本書の刊行によってそれを知らされた、というのが率直な実感だ。

平成九年十二月八日、宴席で横山さんの突然の訃報を聞いた。

「あんなにお元気だったのになぜ…ニュース速報をどこよりも早く出さなければ」と慌ただしく事実確認に追われたことを思い出す。

七回忌を期してまとめられたという本書は二部構成になっている。

第一部は高知市の広報「あかるいまち」に掲載されたエッセー百四十一編。その標題「春夏秋冬」がそのまま本書の名前に採用された。

第二部は聞き書きで、「私と高知市政」というタイトルが付けられている。

昭和十一年一月、水道課量水器夫人に採用されてから、市役所一筋。平成六年十一月に市長を退任するまでの五十八年余をつづつている。そのまま横山さんの体験を通して語ら

れる県都市政の履歴書でもある。

初披露？のエピソードもある。昭和五十三年秋、その気はないのに市長候補に担がれた。断り続ける横山さんの最後の肩を押したのは、当時八十七歳のお母さんの一言。「男じや、やりやり」であったという。

私は、本人への取材で、相談した溝淵増巳元県知事の「面白いもんじやきやってみいや」という誘導発言だったと吹聴していたのだが…。

全編、抑えの効いた筆致で、本人をよく知る聞き書き役、渡辺進さんの貢献が大きい。

輝子夫人の「あとがき」も秀逸だ。横山さんの人となりを知りたい向きには「はじめに」読んだ方がよからう。

*

*

私はある期待を抱きながら本書を開いた。

冒頭に紹介した「電線の地中埋設にまつわるエピソード」が、ご自身の口から語られているはずだと思つてページをめくった。が、それが見たたならなかったのここに追補させてもらった次第である。

エッセーの中で、似たようなテーマを探すと、「ホテルの里」に行き当たる。



三万都市に成長（昭和五十五年）した県都が繁栄のための舞台装置を徐々に整えていった半面、過密や貧困も同時に抱え込んだ。

加えて、連年災害などをきっかけに、ゼロメートル都市の備えに膨大な投資を迫られ、シビアな政策選択と実行が求められていた。

横山語録には「市民の心を心として」を筆頭に、「誠実」や「良心」といった言葉が多く登場する。こうした表現が本人の生きざまと結びついて全く違和感のない希有な地方政治家であった。

（なべしまやすお／高知さんさん）
（テレビ報道制作局長）

高知で古いパン屋というと、私の知っている限りでは、大正末、梅ヶ辻に門田さんという店があったそうです。戦前には、高知市内に、山手、秦泉寺、青木、一柳、永野と、五業者があったことは確かです。

最初は蒸しパン

私の祖父の永野南海男は、昭和二年、旭（現在の旭町二丁目一―五付近）で蒸しパンの製造をはじめました。南海男は大正時代、大阪でパン屋が繁盛しているのを見て、パンづくりに興味を持ち、いろいろと勉強していたようです。

最初は重曹でふくらませる蒸しパンしか作れませんでした。というのも、蒸しパンならセイロがあれば作れますが、焼きパンをつくるには窯が必要ですし、重曹でふくらませたパンで焼きパンは作れないため、重曹以外でパンをふくらませる工夫が必要だったからです。また、砂糖をたくさん入れた生地は重曹ではふくらみにくいため、当時の蒸しパンはあまり甘味のないものでした。

日本独自の酒種パン

焼きパンを作るためにいろいろ調

パンにはケシの実を、つぶあんパンには黒ごまを生地の上にまぶし、ジャムパンは真上に切れ目を二本、クリームパンは端の閉じ目部分に切れ目を三本入れる、というように、ひと目で何パンか分かるようにしていました。それは、どこのパン屋でも同様です。

パンは店頭でもモロ蓋に並べたまままで売っていましたが、自転車での店へ卸しに行ったり、縁日へ売りに行ったりする方が主でした。夜通しパンを焼いては、朝早く出発していました。遠くは、土佐市の縁日へも自転車で行っていました。

昭和二十六年には学校給食パンの指定工場となり、給食用のコッペパンを作りはじめました。今でこそ米飯給食が増えましたが、昭和四十二年まではパンだけだったので、大量のパンを作っていました。

新しいパンの開発

人々の生活に余裕ができてきたこともあり、昭和三十年ごろからパンの種類を増やすようになり、メロンパンやニコニコパンを作りはじめました。当時、アメリカの指導で大阪にパン学校ができ、四国で一名ということで、うちの工場から職人が派

べていたところ、酒種に詳しい人に出会い、その人に習いながら酒種によるパンづくりをはじめました。南海男は元々大工でしたから、自分でレングを積んで窯を作りました。そして、昭和三年から焼きパンの製造をはじめたのです。

昭和五年に北与力町（現在の永国寺町一―四十三）に工場を移し、翌年には乗出（現在のグラウンド通り電停付近）に支店を出しました。

最初はあんパンからはじめて、ジャムパン、コッペパン、クリームパンをつくっていたそうです。

戦災で工場は全滅しましたが、進駐軍向けのパンと洋菓子を作るとい

う条件で優先的に建築資材を出してもらい、工場を再建しました。大阪に電気のパン釜が残っていると聞いて、それを取り寄せたそうです。

進駐軍向けのパンづくり

そして、高知出身の日系人で、アメリカのホテルでコックを勤めていた人を採用し、パンや洋菓子づくりの技術を学びながら、進駐軍から小麦粉などの材料を受け取っては、パンや洋菓子を作って納めていました。パイやカステラを作っていたのを覚えていました。同時に配給用のコッペパンも作っていて、朝早くから大勢

の昔話

永野雄敏



高知のパン屋は数が多い

パン屋で働いていた職人たちが次々独立し、昭和四十年ぐらいから高知のパン屋の数もどんどん増えていきました。最盛期は今から十年ぐらい前でしょうか、県内に約百軒のパン屋がありました。学校給食がパンからごはんに変わってきたこともあり、今では約七十軒に減っています。しかし、高知市は人口比によるパン屋の数が、神戸市に次いで全国二位で、多いことに変わりありません。昔から高知のパン屋は皆仲がよく、組合では年に五回ほど勉強会を開いて、新しいパンの共同開発などを行っています。

私は戦後生まれですから、戦前のことは祖父や父から聞いたことしか分かりません。昔のことをご存知の方がおいでしたら、ぜひ教えてくださいたいと思います。

（旭堂本店社長 株式会社永野）

土の中からドーナツ

永国寺町の工場兼店舗は、戦後何回か、増築や建て替えをしました。その際、基礎を掘り返したところ、土の中から何千、何万ものドーナツ形のパンが出てきました。

それは、固く練った生地を堅焼きにした、直径十センチぐらいの大きさのパンで、戦時中、非常食として大量に備蓄していたものようでした。戦災で焼けて、ほとんど炭状に

の人が店の前に並んでいました。

かぼちややすいかのジャム

私は戦後、五歳ぐらいから見よう見まねで工場の手伝いをしていました。家族や従業員はみな朝五時には起きだし、私は湯をわかしたり、クリームやあんこを炊く準備をしたりしていました。また、缶の底にわずかに残ったコンデンスミルクを水でゆすいで少しづつ集め、それをなめるのを楽しみにしていました。

あんパンは、こしあんとつぶあんがあり、ジャムパンのジャムは長野県から取り寄せたりんごジャムでした。地元のかぼちややすいかでジャムを作ることもありました。かぼちややすいかを蒸したり、ゆでたりしてからつぶし、砂糖を加えて炊くのです。クリームパンのクリームは、牛乳、砂糖、卵、小麦粉を炊いて作りました。

パンの形がいびき餅

いと違って、昔はパンひとつひとつをビニール袋に入れて売るようなことはしません。どのパンも裸のままモロ蓋（木製のパン箱）に並べるので、あんパンは丸形、こしあん

中国茶の世界②

仕入れの旅



西岡克己

僕の茶の仕入れというのは「旅」である。

僕は茶葉の販売と茶館の経営を業としていたので、一年に二回春と冬に中国へ茶の買い付けに行く。中国の茶産地は長江の南一帯に広がっているが、僕が行くのは主に広東省と福建省である。しかしこの二つの省だけでも面積は日本の四分の三以上あり、人口は一億を越えている。少し小さな日本がひとつぶんといっただけだ。この少し小さな日本ひとつぶんを僕は二週間かけてまわる。中国の交通事情はこの三年ほどでずいぶんと変わり、便利になった。高速道路網が発達したおかげで高速バスがあちこちの都市を結ぶようになったからだ。五年前は広東省の広

州から潮州に行くのに夜行列車で一晩かかっていたのが、今では高速バスを使えば六時間で行けるようになった。ほぼ半分の短縮だ。

茶葉の買い付けというのは時間との戦いでもある。限られた時間内にどれだけ多くの茶産地をまわる事が出来るかで成果が決まる。だから天候にも大きく左右される。天気が悪くなると中国の交通ダイヤは確実に乱れるし、茶葉の梱包にもずいぶん余分な時間がかかってしまうからだ。茶葉に湿気は大敵なのである。

去年の冬茶の仕入れは福建省安溪から始まった。関西空港を昼過ぎに出発し、広東広州白雲空港で飛行機を乗り継いで、福建廈門空港に着い

たのは夜だった。廈門は台湾と海峡を挟んで対岸にあり、昔から貿易港として栄えた街である。省都の福州は政治色が強い都市だが、廈門は台湾との両岸交流が盛んなせいもあってとても自由な空気が漂っている。食材も豊富で安い。その日は廈門で一泊し、翌早朝にバスで安溪へと向かった。廈門から安溪までは約二時間の道のりである。安溪県は中国茶で最も有名な「鉄観音茶」の産地で、泉州市に属している。中国の単位では県より市の方が大きいのだ。

廈門を出発して三十分も経てばもうバスは山の中を走っている。言うまでもないが、中国も日本も茶の産地は山の中である。やがて一時間ほど経つと、今度はまわりの山々が石灰質のカルスト形状に変わり、所々に茶畑が見え始めてくる。茶摘みの姑娘たちが自転車に乗って茶畑に向かっている。道路脇の電柱の看板にも「茶」という文字が目立ち始める。安溪は安溪郷に入ったのだ。安溪には「茶都」と名付けられた茶市場があつて数百件の茶農が自作の茶を直売している。安溪で作られる茶の品種は、「鉄観音」「本山」「毛蟹」「黄金桂」などが、なんとすべても安溪は「鉄観音」のルーツなのだから僕はここでは鉄観音しか買わな

い。「本山」という茶はいわゆる鉄観音の代用品である。一般の人は茶葉を見ただけでは区別がつかないくらいよく似ているが、風味は全く別もので、日本や東南アジアに輸出されている「鉄観音茶」はほとんどがこの本山だと思つて間違いないだろう。現在世界中で流通している「鉄観音」という名のお茶がすべてこの安溪だけで生産できるわけがないからだ。

安溪の中でもいい鉄観音が作られる場所は決まっています。なかでも西坪と祥華が二大産地である。どちらも海拔千層を越える山があり、日当たりがいい。鉄観音の香りを決定付けるのは日照角度だという。だから本当にいい鉄観音はこれらの山頂付近でだけ生産される。僕は茶都の中でこの二カ所の茶農が出している店だけを集中的にまわることにしている。なかでも祥華の茶農である張さんのお茶が気に入っている。彼は一昨年に「海峡兩岸茶文化交流比賽会」という福建と台湾との交流を記念した品評会で金獎を受賞し、北京で表彰されたのだが、僕はこの直前に初めて張さんに会つた。

僕を張さんに紹介してくれたのは茶都で知り合った楊山虎という台湾人だった。彼は安溪で台湾品種の烏

龍茶を作るかたわら茶文化交流会の役員もやっている人で、安溪で最も有名な台湾人の一人だ。彼は僕を張さんの店に連れて行き、「この人が安溪の茶王だ」と言った。

張さんの店でその金獎を受賞したという鉄観音を飲んだ時、僕は言葉失つてしまった。その深い味と香り、今まで飲んできたどのお茶よりも柔らかくしなやかで透明感があり、飲んだあとの余韻（鉄観音の場合は山韻と呼ぶ）がいつまでもあとに残つた。まさに「茶王」と呼ぶにふさわしい茶であり茶農だと思つた。

僕は茶都に着くといつも真つ先に張さんの店に行く。張さんも僕がそろそろ日本からやってくるころだと感じて、出来のいいお茶を用意して待つてくれている。あいさつもそこに僕たちはお茶を飲み始め、えんえんと夕方まで品茶をする。品茶とは数種類のお茶を同時に蓋碗で淹れて味を比べるのだ。食事も取らずに品茶をするので途中張さんの奥さんが芋粥を作ってくれる。この素朴な味わいが実に鉄観音と合うのだが、中国最高級茶に芋粥が合うなどと考える日本人はまずいないだろう。こういうところが中国なのである。

鉄観音という品種は同じ茶園で作つたものでも採茶日の違いや採茶時



品茶風景

国から国際小包を送る場合、日本と違って郵便局内で郵便局員立ち会いのもと、専用のダンボール箱に荷物を梱包しなくてはならない。保安上の問題らしいが、この手間がなかなかややこしく、また局員の能力や人間性によつてかかる時間が極端に変わってくる。だから僕が郵便局に行く時はいつも、いい人に当たりますようにと祈りながら向かうのである。

やつこの思いで荷物の発送を終えると、とたんにどつと疲れが襲ってくる。そのままの茶産地に向かうのは体力的にきついで、まず体力強化のためにその土地のうまいものを食べに行く。安溪は山間部なので海鮮はないが、おいしい山の幸がたくさんある。安溪菜の珍味として珍重される川魚の「光魚」として珍重される川魚の「光魚」というのは鯉に似た淡白な味の魚で、スープにして食べるのだが、なんとこの魚はスープに浮いたウロコを食べるのである。一円玉くらいの大きさのウロコをシャリシャリと食べるのだ。なんともいえない食感だ。またキノコ類も豊富で、お茶の樹にし

か生えないものや真つ赤な色をしたものなど、まず日本では見かけることのないようなものが安溪にはたくさんある。

安溪で鉄観音の買い付けが終わると、次は武夷山に岩茶を買いに行かなくてはならない。武夷山へは安溪から二日に一本の割合で夜行列車が出ている。夕方に安溪を出発すると翌朝武夷山に到着する。駅へ切符を買いに行くと安溪駅で発売予定の切符は二枚しかないという張り紙がしてあった。さびれた駅舎には誰もいない。出発の一時前に切符を販売するという。駅のまわりは閑散として人気がなく、時間をつぶす場所もないので待合室にひとりぼつんと座つて待つた。夕暮れが近づいてきてあたりが薄暗くなつてくると、どこか遠くからアヒルの鳴き声が聞こえてきた。いつもそうなのだが、誰とも日本語を話さない日が何日か続くと、無性に誰かと日本語で話したくなってくる。ふと気が付くといつの間にか日本語の歌を口ずさんでいる。大きな大陸のほんの小さな町にぼつんとひとりであることが、旅を感じてしまふのかもしれない。

にしおかすみ／中国茶研究家
・バンブー茶館オーナー

平成十五年、開館十周年を迎えた私ども宿毛文教センターは、「とびだせ独創力!!」を合言葉に、十一月、記念イベントを開催しました。

この施設は、中央公民館、坂本図書館と私が勤務する宿毛歴史館の三

宿毛市立宿毛文教センター 開館10周年記念事業 「とびだせ独創力!!」で感じたこと

矢木 伸欣

盛大に開催しようと相談し、具体的に何をするか知恵を絞りました。

当然、三館にはそれぞれ違ったトリートとニーズがあります。そこで、「とびだせ独創力!!」という合言葉をきめて、各館それぞれが独自のカラーでイベントを準備して、すべてを同期間一斉に各会場で開催しようということになりました。それぞれのカラーを描き合わせて、センター全体を彩ろうというわけです。

そして、公民館は「奥谷博自選展」、図書館は「顕彰 坂本嘉治馬」、歴史館は「野中兼山と宿毛展」の開催を決定しました。

決定してからはアツという間に日々が過ぎ去っていきます。焦りながら右往左往しているうちに十一日間の会期がスタートしました。

公民館は、宿毛出身で日本芸術院会員の洋画家、奥谷博さんの全面支援をいただいで個展を開きました。ご自身によるギャラリートークやサイン会もあって、多くの来館者を集めました。

図書館は、坂本図書館創設者で出版社の富山房創始者でもある坂本嘉治馬（宿毛出身 故人）の顕彰碑を館内に設置し、関係書籍も展示しました。また、孫で現富山房社長の坂本嘉廣さんに記念の講演をいただき

ました。

歴史館は、江戸時代初期に土佐の政治に強く関与した野中兼山について、宿毛との接点を中心に、高知県と愛媛県から集めた資料で検証しました。沖の島での国境論争に関する資料を初公開したり、兼山遺児の宿毛での約四十年間にわたる幽閉生活を紹介しました。

期間中、公民館は三六五八人、図書館は一七六〇人、歴史館は八七七人の来場者をかぞえ、職員一同を驚かせました。

記念イベントを終えて改めて振り返ると、この記念イベントではたくさん「はじめて」を経験したな、とつくづく感じます。

公民館は「はじめて」の美術個展。図書館は「はじめて」の顕彰碑設置と除幕式。歴史館は「はじめて」の高知県外からの資料貸借。

さまざまな「はじめて」の中で、一番鮮烈だった「はじめて」は、三館が共通目的のもと、連携を保ちながら個々が主役のイベントを一斉に開催する、という「はじめて」でした。

もちろん、連携は普段から頻繁に行っていることですが、それは一つの館の活動に対する他館の協力というもので、今回のようなそれぞれが主



「奥谷博自選展」でのギャラリートーク

役の立場での連携は、意外にも「はじめて」だったのです。たくさんの「はじめて」を経験する中で、衝突や混乱、疲労やいらだちが繰り返してききましたし、関係者に多大な迷惑もかけてしまいました。しかしその結果として、来館者にたくさんの笑顔をいただきました。そして同時に、センター全体の財産も一つ増えたような気がしています。

今回の記念イベントをステップに、今後、センター内の活動がより一層広がれば、と思わずにはいられませんが、

そしてそう、あとは、とびきりの独創力がとびだしてくるのをワクワクしながら期待しましょう。ひょっとしたらもうすでに…。

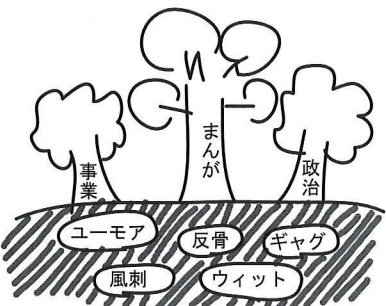
やぎのぶよし／宿毛市立宿毛歴史館主査 学芸担当



ユーモア・ウィット・風刺が 効いた土佐の土壤から、 色とりどりの「まんが文化」 を生み出そう！

昨年春、高知市が取り組む「まんがによるまちおこし」事業のメイン行事として「こうちまんがフェスティバル2003」を開催しました。その第二弾「まんさいーこうちまんがフェスティバル2004」を、四月三日・四日、文化プラザがるぼーとで開催します。

今回は、市民参加の手作りイベントにしようとして、地元まんがグループ



まんが文化の土壤

図① 高知の精神性、風土

の代表をはじめ、同人誌即売会主催者、まんがNPOなどのまんが関連の方々や、地元町内会、商店街、さらには経済団体や全学的なボランティア団体等、総数二十五名の実行委員会が結成されました。

フェスティバルの開催に向け、メンバーが共通認識を得るため、会の最初のころには、フェスティバルの意義や目指す方向性について協議をしました。まずは、なぜ「こうち」で「まんが」なのかを実行委員会が導き出した答えが図①です。

この図は、下半分の斜線部分が土壤Ⅱ高知で、その中には「ユーモア」「反骨」「ギャグ」「ウィット」「風刺」といった高知の精神性、風土の特徴が示されています。そして、そういった精神性、風土Ⅱ文化の土壤が自由民権運動といった政治運動や、たくさんのまんが家らを生みだしてき

おとなに読ませたいまんがベスト10

	勉強もせんと まんがばかり 読んで...
	まんががなんか 読まん 本を 本を 本を
	ずい 何言うがなあ まんがも 人生を変えてしま うほど影響を受ける
	そんな おとなやおかん 学校の先生に このまんがを 読ませたいっ！

●まんがに対して今ひとつ理解の薄いおとなに読ませたい、そして少しでも認識を改めてもらえたら…。

●中・高校生を対象に事前にアンケートを行います。

●ベスト10は会場で発表します。

たのだということを表しています。そして、こうした土壤Ⅱ高知に住む我々が、高知が「まんがシティ」になるには、「まんがによるまちおこし」をするには、どうすればいいのか、それらのことを知る手がかりを見つける手段となるイベントにしようということが決定しました。

- このことを踏まえ、フェスティバルを「運営する人も参加する人も楽しめるものにする」「子どもも楽しめるものにする」という方向性のものと、メンバーから映画や教室、シンポジウムなどまんが関連のさまざまなアイデアが出されました。それらアイデアに、
- ・まんがは文化だ！
 - ・まんが文化の土壤を体感しよう！
 - ・まんがによるまちおこしのヒントをさがそう！
 - ・まんがを楽しもう！
- といったフィルター（意味づけⅡ味付け）を通し、最終的に約三十の催

と高知のまんが文化の土壤や楽しさを実感できると思います。



散歩の途中で

鏡川河口浦戸湾に浮かぶ小島「丸山台」。れっきとした「公園」なのだが、訪れたことのある人はどれぐらいいるだろうか。以前から気になってはいるが、上陸する機会はありません。明治時代には人工の温泉場が作られて大繁盛していたそうで、板垣退助も訪れた「自由民権史跡」だという。あの島が温泉アミューズメントパークだったなんて、今の姿からは想像もつかない。現在は人間の保養地ではなく「野鳥の楽園」として繁盛していて、木の枝にはまるで大きな葉が繁るか実がなっているかのようになり、びっしりと鳥がとまっている。

風俗

小説家の復活を

葛西善蔵など、かつて作家と言われる方々には、常識では計れない生き方を営み、時にはそれを描いて世に問う人がいた。太宰、織田作、坂口安吾に象徴される破滅型無頼作家も、壇一雄で幕を引いたかに見えた。伊集院静を最後の文士という声もあるが、読者層、知的水準のアップと出版社の営業施策、といった背景もあってか、気が付くと作家の皆さん、人並み以上の資産家で、先生と呼ばれる教養を持つ人が大半となった。功なり名遂げた先生方は、警世の見識者として、講演や講和を重ね、大勢の善男善女に生きる指針を与えられていく。しかし多数のファンを抱え、人生訓を書く

ようになつた作家の作品は、なぜか色褪せてくる。体制に支持されるということは、基本的に良俗美風を壊さないものになつていく。うだ。新人として喧伝される人の作品も、作品以外の話題性や題材に特異性があつて「売れる」ものが大半、全体には意外と人畜無害を心得たものが多い。マスコミ受けはしなくても、タブーに挑戦し、真摯な己の思いや生き様を綴つてこそ本物の作家だと思つたのだが。如何に生きるかを説くのでなく己の生き様を描くので精一杯という姿勢が欲しいもの。私は教養に富んだ成功者の紡ぐ「話」や年端も行かぬ若者のゲーム感覚の世界より、事実を語つて迫ってくる作品に打たれる者だ。そんな中で、最近の事、嬉しい出会いがあつた。車谷長吉の「贗世捨人」、花村萬月の「百万遍」に触れたのだ。息を呑んで、本物の小説家復活を感じたのだが。 (3)

第20回写真コンテスト 高知を撮る 入選作品展

過去から現在にいたるまでの高知県内の出来事や風景、人々の暮らしなどを写真で記録し、高知のさまざまな表情を伝えるとともに、未来の高知のあるべき姿を考えていこうというコンテスト。「記録写真部門」「I LOVE 高知部門」の2部門で、今回応募のあつた204点の作品の中から、特選、準特選、入選に選ばれた作品約80点を展示します。入場無料。ぜひ、ご鑑賞ください。

会期：3月9日(火)～3月14日(日)
時間：午前10時～午後7時
(最終日は午後5時まで)
場所：高知市文化プラザかるぽーと 7階
市民ギャラリー 第4展示室

主催：(財)高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2-1
(電話 088-883-5071)
協賛：富士写真フィルム株式会社
後援：株式会社ラボネットワーク
高知県カメラ商組合

今号の表紙

「唐組」 小嶋博子
組紐と運命的な出会い(少し大きですが)をして、まもなく30年になろうとしています。組紐を学ぶ者にとって唐組は目標の一つです。30年近く学んでもまだまだ到達点の見えない私ですが、組紐を少しでも身近に感じてほしいと、今日も目の前に座っています。(おじまひろこ)



高知を撮る 春のめがね橋(平成14年 大正町) 森田清一

第19回写真コンテスト入賞作品

昔は森林軌道線として利用されていためがね橋だが、今は山道の生活道として利用されている。春は遠景に一点の桜が美しい山里の文化財である。

「優等生」受難の年である。と言っても、学校のいじめの話ではない。物価の優等生の玉子君がすっかり落ち込んでいる。何でも、半年も冷蔵庫に保管した古い玉子に、適当に「賞味期限」をつけて、出荷した不埒な業者がいたり。一部は回収したりしいが、大半は消費されたようである。聞いた途端に、腹具合がおかしくなってきた。冷蔵玉子騒ぎのほとほりもさめないうちに、今度は鳥インフルエンザの出現である。今年「ざる年」で、「とり」の出番は来年のはずだと思つていたら、なんと、続いて「いぬ」まで登場してきた。桃太郎気取りの、ブッシュさんに尻尾を振つてついで行くイヌである。未が思いやられる。「いのしし」は年をわきまえず、毎年のように、里に出没している。彼等の縄張りを荒らした報いと分かつてはいるが、迷惑な話である。

顔見世

風俗歳時記



「ねずみ」は一時のように出沒しなくなつたが、マウスが活躍する。T産業が、今年の景気を引っ張っている。感謝すべきである。うじ」と言えば、BSE問題の再燃である。プリオン(BSE)の病原体)やウイルスは、他個体への移住はもちろんで、「種」の「壁」も乗り越えて渡り歩く。「国」にこだわる人類をあざけつていよう。そして、今年も「うじ」年の予感がする。タイガースは遂に優勝したが、いまだに勝たない「ハルウラフ」も人氣を集めている。「弱肉強食」が横行する昨今、判官鼻は貴重なバランス感覚に見える。話が「うま」まで飛んでしまったところで、紙数もなくなつてきた。何はともあれ、今年はずしの顔見世の大変な年になりそうである。顔見世でもいい、戦や不景気が「ざる」年であつてほしい。(路)

the Classic

福祉チャリティーコンサート
関西フィルハーモニー管弦楽団高知公演

Kansai Philharmonic Orchestra

【指揮】
藤岡 幸夫

【管弦楽】
関西フィルハーモニー管弦楽団

「クラシックの魅力を理屈抜きに心と体で感じてほしい」という指揮者・藤岡の想いがこもった「MEET THE CLASSIC」コンサートをお楽しみ下さい。

SACHIO FUJIOKA & KANSAI PHILHARMONIC ORCHESTRA

Meet the Classic in Kochi

“ENJOY! オーケストラ”

PROGRAM

アンダーソン：舞踏会の美女

エルガー：行進曲「威風堂々」第1番

R.コルサコフ：交響組曲「シェエラザード」より“若き王子と王女”

ストラビンスキー：組曲「火の鳥」全曲（指揮者の解説を交えて）

…その他



2004

3/21

日 14:00開演 (13:00 開場)

高知市文化プラザ大ホール

全席自由 一般：2,000円 (1,400円) シニア (65歳以上)：1,500円 (1,050円)

高校生以下：1,000円 (700円) 障害者：無料 ※申込み必要

※障害者（身障者手帳、療育手帳所持者）の方で入場を希望される場合は、高知市身体障害者連合会（電話088-872-3880）までお申込み下さい。なお、演奏会当日は身障者手帳、療育手帳をご持参下さい。

※（ ）内の料金は、身障者手帳1種及び療育手帳Aの方の介護者1名の料金です。

※未就学児童の入場はご遠慮下さい。なお、生後6ヶ月のお子さまより託児室をご用意いたしますので事前にご予約下さい。（定員に達し次第締め切らせていただきます。）

【チケット販売】 高知市文化プラザミュージアムショップ・高新プレイガイド・高知大丸プレイガイド
高知県民文化ホール・高知県立美術館ミュージアムショップ

【通信販売】 直接購入が出来ない方は通信販売をご利用下さい。必ずお電話（088-883-5073）にてご予約の後、郵便振替口座【加入者名：（財）高知市文化振興事業団 口座番号：01680-5-14869】に公演名・券種を明記の上、チケットの合計金額と送料430円を合計した金額をご入金下さい。入金確認後、簡易書留にて発送いたします。

主催：（財）高知市文化振興事業団
高知新聞社

後援：NHK高知放送局
RKC高知放送
KUTVテレビ高知
KSSさんさんテレビ
KCB高知ケーブルテレビ
エフエム高知

協力：高知市身体障害者連合会

お問い合わせ：（財）高知市文化振興事業団企画事業課
TEL 088-883-5071
http://www.bunkaplaza.or.jp

KEIRIN 00 この演奏会は、「競輪公益資金」の補助を受けて開催します。